水と命は大切だけど

写真家　今村 健志郎

途上国では特に水と安全に気を遣っている。私の場合、撮影は2、3週間と短期決戦で病気や怪我をする暇がないからだ。ミネラル・ウォーターを常備し、酒は飲んでも生水は絶対に飲まない。移動の足は安全と利便性を優先し、現地の事情に詳しいベテラン・ドライバーが運転する四輪駆動が基本だ。

昨年8月に給水プロジェクトを取材するためにルワンダを訪れた。移動中、ドライバーが急に車を停め、あれを見ろという。泥で濁った小さな沼で人々が黄色いポリタンクを沈めて水を汲んでいた。さらにその横で牛たちが一緒に水を飲み、少年が満タンになったポリタンクの口を、バナナで栓をして頭に乗せ、私の目の前を笑顔で通り過ぎていった。

撮影後、車に戻って足元に転がったミネラル・ウォーターのボトルを手に取り、がぶりと飲んだ。後ろを振り返ると、未舗装の道路から巻き上がった砂埃がもうもうと、道行く人々を飲み込んでいた。

少年の笑顔が印象的だったせいか後味が悪かった。彼は泥だらけの水をどうするのだろう?私はその答えを知ることなく、写真だけを撮って通り過ぎてしまった。自分が要領よく獲物をつまんでゆく狡猾な動物に思えた。

私が尊敬する写真家、セバスチャン・サルガドは1985年、エチオピア難民の取材で、夜通し難民と共に歩いたと聞く。そして翌朝カレマ・キャンプに到着したとき、あの神々しい光を捉えた。

もちろん命あってのモノダネだから水と安全は大切だ。しかし彼のように被写体に寄り添いしっかりと写真を撮ってみたいと思いつつ、未だ果たせていない。

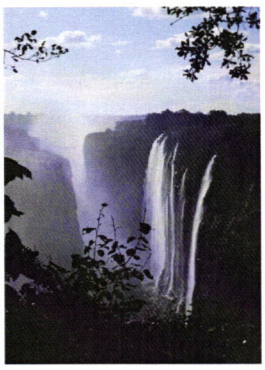
最初にアフリカの地を踏んだ頃の思い出

JECK会員 高遠 宏

私が最初にアフリカの地を踏んだのは、日本から英国のロンドン経由で約24時間のフライトで着いたザンビア国の首都ルサカ（南緯15度25分、東経28度17分）であった。1994年8月「ザンビア国南西地域チーク林資源調査」調査団の一員として参加し、ザンビア国南西地域約50万haの調査対象地域のチーク林[注]の土壌調査、土壌分類図作成が業務であった。

注）本来のチーク（クマツヅラ科の*Tectona grandis L.*）ではなく、ザンビアンチークまたはローデシアンチークと呼ばれているアフリカ南部の砂地に純林が見られるマメ科の*Baikiaea plurijuga*で、材は赤褐色をしており、床材や家具材として用いられている。

ザンビア国はアフリカ中南部の内陸国で、一部の地域を除き全体に標高900mから1500mの高原の乾季・雨季のはっきりした半乾燥熱帯地域で、アフリカで四番目に長いザンベジ川があり、川の中流のザンビアとジンバブエの国境にあるヴィクトリア・フォールズは世界遺産でもあり世界の三大瀑布の一つとして有名である。

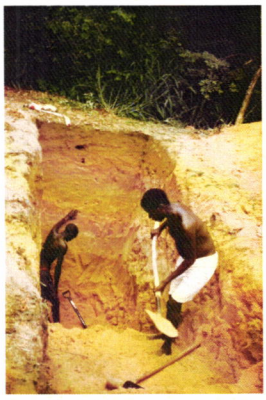


ザンビア国は旧英国領の北ローデシアが1964年10月24日の東京オリンピック開会式の日に独立し、開会式の入場行進には北ローデシアの国旗を掲げ、閉会式には新しいザンビア国の国旗を掲げて行進した。また、ヴィクトリア・フォールズは土地の人々から「雷鳴のとどろく水煙」とよばれているが、英国のリヴィングストンがザンベジ川を探検した時にこの大きな滝を見て、ヴィクトリア女王に因んでヴィクトリア・フォールズと名付けたので有名である。

調査地はザンビア南西部に位置する西部州のセシェケ地区で、ザンビア南部の都市リヴィングストン市から西へ車で数時間の所である。この地域は、広く砂が地表を覆っているカラハリ・サンド地帯（現在ナミビア国にあるカラハリ砂漠が有史前にアンゴラ国やザンビア国まで広範囲にあった大カラハリ砂漠の砂が堆積して土層を形成している地帯）で、深いところでは砂の層が6～7mにもおよび植物の生育にも不利な地域で、干ばつの影響を受けやすい。このような砂地のところでも森林となっている落葉樹であるザンビアンチークの森が残されている。この樹木を利用しながら資源を確保するための森林管理計画を作成することについて我が国に要請があり、調査団が派遣されることになった。

セシェケ地区の町でも公共の建物やホテルなどには電気、水道があるが、ほとんどの民家（土壁と草葺きの屋根）には電気も水道も無く、町から離れた集落には今でも数人の夫人を持った酋長の各夫人の家が集まって生活しているところが多くある。彼らは狩猟と若干の作物栽培と家畜の飼育と収穫物の販売で生計を立てているようである。また、炭焼きで木炭を販売しているのが見受けられる。

このような砂地のところで土壌調査を実施するのに、毎日作業員をつれて現場（途中で象が通った足跡を見かける）に行き試孔（土層を調べるための穴）を掘らせるのだが、彼らは時々マラリヤが発病し、休みをとることがあった。ザンビアにはマラリヤ患者が多く、子供の死亡率が高い。日本から出る前にJICAのドクターからマラリヤの予防薬の服用を勧められ、滞在中は予防薬の服用と蚊帳と蚊取り線香の使用でマラリヤに感染することは無かったが、蜂に刺されて腕が腫れ上がり公立の病院に行き、治療してもらったことがあった。ザンビアでは公立の病院は医療費が無料であったが、病院には多くの患者がおり、その中でもマラリヤ患者が非常に多かった。



アフリカの都会から離れた奥地で調査のため生活するのには、不便なことが多く、特に食材の調達には苦労する。そこで月に1,2回はリヴィングストン市まで生活必需品の調達に出かけ、増水期や渇水期のヴィクトリア滝を見物したりするのが仕事の骨休みになった。

また、ザンベジ川（川にはワニやカバがいる）の近くにある宿舎付近からのザンベジ川に沈む夕日の美しさや奥地の調査地で夜に眺めた無数の星空は忘れられない。